

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 10 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520416

研究課題名(和文) アジア諸語を対象とした主体・主観性の構文と語彙化に関する認知類型論的実証研究

研究課題名(英文) Two kinds of subjectivity and their lexicalization and construction patterns in Asian languages: A cognitive-typological research

研究代表者

上原 聡 (UEHARA, Satoshi)

東北大学・高度教養教育・学生支援機構・教授

研究者番号：20292352

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、最近の認知言語学の進展により更に研究が進んだ言語の「主体性」「主観性」の問題に関して、言語類型論(対照言語学)の手法を用いて、言語間にその差異が見られるか否かを、アジアの諸言語を対象として調査・分析することにより検証したものである。関連する言語現象別に主観性表現を分類し、機能・形式上の観点からその4分類を提案した。その主観性表現の語彙化・文法化のパターンの差異により言語の類型化を行った。これまで語順類型など言語の客観的な面をもとに類型が指摘されていたが、主観性についても類型が可能であること、そしてその多様性の様相を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：We have made cognitive linguistic investigations on Asian languages in terms of linguistic subjectivity to examine its patterns of variation for its typological classification. This research based the notion of subjectivity on the recent advancement in the Cognitive Linguistic studies of linguistic subjectivity, proposed a 4-way classification of subjective expressions, and utilized the contrastive linguistic methods in linguistic typology in investigating patterns of lexicalization and grammaticalization of the subjective expressions. One of the research findings is that languages can be classified into types and subtypes in terms of subjectivity.

研究分野：言語学

キーワード：主観性 主体性 認知言語学 言語類型論 アジア諸言語 事象構造

1. 研究開始当初の背景

(1) 認知言語学の研究によって、言語がそしてその現象が深く主観性(subjectivity)に根ざすものであることが明らかになってきた。これまで言語主体とは独立して存在する客観的な対象であるとされてきた、言語構造や文法構造が際立ちの認識や視点の置き方などの言語主体の持つ認知プロセスの反映であり(ラネカーなど)、意味変化やそれに関わる解釈が言語主体に備わっている認知能力によって作り上げられる(トロゴットなど)ことが理解されてきた。

(2) 同じ認知言語学の subjectivity (及び subjectification) の研究であっても、ラネカーとトロゴットでは概念上の差が指摘され始め、日本語訳でも、「主体性」が「主観性」と並んで(それぞれ「-化」とともに)登場し、研究者の間でも混乱が見られるようになった。

(3) 言語類型論は、言語研究の対象を個別言語から世界の言語に広げ、語順・形態といった文法的特長によって言語を類型化し、言語の個別性/多様性と普遍性の両面を、実際の言語の記述による検証を経て捉えようとする研究分野である。特に認知言語学的・構文主義的研究の流れを汲み、統語理論を言語類型論の立場から再検討したクロフトなどその最近の理論的展開には目覚しいものがある。しかしながら事象構造に関わる主観性に関する記述・検証に関しては、これまで類型化のもととなる言語の文法的特徴として中心的な扱いを受けたとは言えず、言語類型論の知見が十分に活かされていないという状況であった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、**認知言語学**によって明らかになった**言語の主体性・主観性**(両者は英語ではともに subjectivity)の、特にその**命題事象**内に表出する形式としての語彙化や構文化に関して、言語間の多様性と類型化の可能性を、**アジアの諸言語**を主に**言語類型論**の記述的・実証的な研究手法によって明らかにすることであった。

3. 研究の方法

(1) 事象構造、動詞意味論の主観性に関わる研究のうち、これまで中心的に研究してきた内的状態述語構文などに関する研究成果を、他の構文の研究の雛形になるような形で集約し、直示移動や主観的移動の構文など他の関連構文に関しても研究を進める。各構文に関する記述的なデータの収集作業を精力的に行い、そのデータにもとづいた汎言語的に適用可能なその主観性・主体性の定義の整理・設定・検証を行う。

(2) 言語における「主観性」のプロトタイプ的な定義を検討しながら、その定義に基づく「主観性」に関わる言語のデータの収集・分析を、特に従来の認知言語学のデータの中心となった印欧語以外の言語であるアジアの言語において集中的に行う。特にどのような事象を表す構文に「主観性」の表出が見られるかのパターンが見られれば、それを集中的に各言語において見て行くことにする。

(3) 各言語間の様々な事象を表す構文の類似点・差異を指摘し、類型化を検討する。また、個別言語の多様性がいかなる要因(の組み合わせ)で説明できるかを考察する。

4. 研究成果

(1) 言語の「主体性」・「主観性」についての定義

言語学一般に限っても「主体性」・「主観性」という言葉が多岐に使用され、また subjectivity/ subjectification という英語に関しても、認知言語学のラネカーのそれと言語類型論のトロゴットのそれでは異なる言語現象を対象とすることも多いため、英語での subjectivity 理論やその研究成果を正しく理解・導入する上で、その本研究での定義を汎言語的に適用可能な形で明確にすることが必要であった。

これに関して一定の成果を納めることができ、ラネカーの subjectivity の理論はその定義や対象とされた言語現象とその議論の上からも「主体性」と訳されるべきものであり、しかしながらトロゴットのものとも共通する「主観性」とも訳せる現象も見られることなどを明らかにした。また、その過程で、subjectivity をいう時それが「捉え」の問題か「表現」の問題かについても理論間に差が見られ、両者の関係についても明らかにした。(この成果については、現在校正中の論文集において出版・公開の予定。)

認知言語学での subjectivity の現象を分類し明確にし、「主観性」「主体性」などに訳し分けることは、日本語学を始めとした日本での言語学諸学会の主観性研究にも意義のあることである。

(2) アジア諸言語を中心とした主観性に関わる言語現象データの収集・分析

文献資料としてアジア諸言語を中心に多言語の記述文法書(reference grammar)、更に事象構造の言語類型に関する文献の中から、主観性現象に関する記述や議論の要点を整理するとともに、関連する用例データの収集・分析を行った。また自ら母語話者に調査することによりデータ収集し明らかにしたこともある。それらにより、明らかになった主なことを以下にまとめる。

ラネカーなど英語の現象をもとに主観性について議論されていることが、日本語

などにも見られること、そしてその異同についても検証された。また、日英両語で対照的にいわば二元論的に捉えられていた現象も、韓国語・タイ語・中国語他において様々な程度で見られることが検証された。

通言語的に表現の主観性が見られる事象として、移動事象構文、授与構文、位置関係構文、内的状態述語構文、参与者指示表現として敬語（社会的直示）構文などが挙げられる。

主観的な表現傾向が強いとされる日本語において主観的な表現の類型を行うと、類間に継続性のある4分類が認められる。それらは「体験者主観性表現」「情意者主観性表現」「認識者主観性表現」「対聴者主観性表現」である。

言語の主観性研究に言語間差異の概念を導入し、その言語の表現における多様性を、そのデータを収集して実証的に示した意義は大きい。

(3)通言語的な差異および類型

言語間では、主観的な表現のうち、特に「体験者主観性表現」においてその言語化（語彙化を含む）・慣習化（conventionalization）のパターンと程度において差が見られる。語彙化（直示述語化）するか構文形式によって示されるか、無標となるか有標となるか、どの事象構文において慣習化されるかにより、言語の類型化が可能となった。

これまでの類型論的研究は、客観的に捉えられる事象に関する言語間差異を見出すことに終始していたとしても過言ではなく、言語類型論において主観性に関して統一的に取り上げその類型化の可能性を示したことは新知見である。

(4)今後の展望

本研究により残された課題・今後の展開の可能性として次のようなものが挙げられる。

資料・文献を増やしデータ収集・分析をさらに進め、また対象とするアジア地域を越えて言語の数を増やし、より汎言語的なデータに基づいた主観性言語現象の多様性の様相の検証と類型化を進める。また、主観性類型と他の言語類型（代名詞省略型言語とゼロ代名詞型言語など）との関連性・相関性についても考察する。「主観性」に比べて「主体性」については特にその言語間差異についてデータの収集が困難であった。それについても今後さらに資料収集を行い、言語類型論的手法を用いて研究を行う。

本研究は「主観性」を中心としたが、今後はこれを展開させ、「主観化」及び「間主観性/化」についても共時的観点・通時的（文法化の）観点を合わせ、また言語進化との関わりについても考察・分析を進める。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計24件）

上原 聡、言語対照のための主観性表現の類型試案—日本語を題材として—、東北大学言語・文化教育センター年報、査読無、第1号、2016、33-43

Ikegami, Yoshihiko、‘Subjective Construal’ and ‘Objective Construal’: A Typology of How the Speaker of Language Behaves Differently in Linguistically Encoding a Situation、認知言語学研究、招待、第1巻、2015、1-21

上原 聡、日本語の「人称制限」は「人称」制限ではない—内的状態述語における話者・概念化者・体験者を区別する—、日本認知言語学会論文集、査読無、第15巻、2015、112-124

Uehara, Satoshi and Kingkarn Thepkanjana、The So-called Person Restriction of Internal State Predicates in Japanese in Contrast with Thai、*PACLIC 28 - Proceedings of the 28th Pacific Asia Conference on Language, Information and Computing*、査読有、2015、120-128

Thepkanjana, Kingkarn and Satoshi Uehara、Effects of Constituent Orders on Functional Extension Patterns of the Verbs for Give: A Contrastive Study of Thai and Mandarin Chinese、*Language and Linguistics*、16、査読有、2015、43-68

Sanders, Robert and Satoshi Uehara、A syntactic classification of the synchronic use of gěi in Beijing Mandarin: A spoken corpus-based case study of its polyfunctionality、*Chinese Language and Discourse*、Vol. 3, No.2、査読有、2013、167-199

Ono, Naoyuki、Event structure and the Japanese indirect passive、James Pustejovsky, Pieretta Bouillon, Hitoshi Isahara, Kyoko Kanzaki, and Chungmin Lee (eds.) *Advances in Generative Lexicon Theory*、Springer. 査読有、2013、311-326

Uehara, Satoshi、The cognitive theory of subjectivity in a cross-linguistic perspective: Zero 1st person pronouns in English, Thai and Japanese、Miyamoto, Ono, Thepkanjana and Uehara (eds.) *Typological Studies on Languages in*

Thailand and Japan, Hituzi Syobo Publishing、査読有、2012、119-136.

Theeraporn Ratitankul and Satoshi Uehara. A contrastive study of pronominal forms in English, Japanese and Thai: A parallel corpus approach、Miyamoto, Ono, Thepkanjana and Uehara (eds.) *Typological Studies on Languages in Thailand and Japan*, Hituzi Syobo Publishing、査読有、2012、137-158

Narrog, Heiko、Beyond inter-subjectification: Textual uses of modality and mood in subordinate clauses as part of speech act orientation、*English Text Construction*、査読有、2012、29-52

〔学会発表〕(計20件)

スィリアチャー ロイケオ・上原聡、対訳コーパスを使った日本語とタイ語における一人称表現使用の対照分析—漫画における一人称表現の出現数を中心に—、言語処理学会第22回大会、東北大学、2016年3月10日

大槻くるみ・上原聡、日本語心理動詞文のスル/ナル表現の選択に見られる中古から現代にかけての事態把握の変化、言語処理学会第22回大会、東北大学、2016年3月10日

Narrog, Heiko、Limits of (inter-)subjectification in late stages of grammaticalization、Johannes Gutenberg-Universität、2015年8月5日

Uehara, Satoshi and Kingkarn Thepkanjana、The so-called person restriction of internal state predicates in Japanese in contrast with Thai、The 28th Pacific Asia Conference on Language, Information and Computing、Phuket (タイ国)、2014年12月14日

上原聡、日本語の「人称制限」は「人称」制限ではない—内的状態述語における話者・概念化者・体験者を区別する—、日本認知言語学会第15回大会、慶応大学、2014年9月20日

上原聡、聞き手領域への移動を表す「来る」表現に関する—考察—タイ語との対照から日本語を考える—、タイ国日本研究シンポジウム、チュラロンコーン大学(タイ国)、2014年8月26日

Narrog, Heiko、(Inter)subjectification and its limits in secondary grammaticalization、21st International conference on Historical Linguistics、University of Oslo (ノルウェー)、2013年8月5日

Uehara, Satoshi and Kingkarn Thepkanjana、Implicit reference to the ground in pronoun drop languages: A case study of internal state predicates in Japanese and Thai、The 12th International Cognitive Linguistics Conference、University of Alberta、Edmonton (カナダ)、2013年6月28日

Thepkanjana, Kingkarn and Satoshi Uehara、A contrastive study of grammaticalization patterns of the verbs for 'give' in Thai and Mandarin Chinese、The 12th International Cognitive Linguistics Conference、University of Alberta、Edmonton (カナダ)、2013年6月24日

〔図書〕(計5件)

中村芳久・上原聡、開拓社、ラネカーの(間)主観性とその展開、校正中

Narrog, Heiko、Oxford University Press、Modality, Subjectivity, and Semantic Change: A Cross-Linguistic Perspective、2013、319

Miyamoto, Tadao, Naoyuki Ono, Kingkarn Thepkanjana, and Satoshi Uehara、Hituzi Syobo Publishing、*Typological Studies on Languages in Thailand and Japan*、2013、239

6. 研究組織

(1) 研究代表者

上原 聡 (UEHARA, SATOSHI)
東北大学・高度教養教育・学生支援機構・教授
研究者番号：20292352

(2) 研究分担者

小野 尚之 (ONO, NAOYUKI)
東北大学・国際文化研究科・教授
研究者番号：50214185

ナロクク ハイコ (NARROG, HEIKO)
東北大学・国際文化研究科・教授
研究者番号：40301923

(3) 連携研究者

池上 嘉彦 (IKEGAMI, YOSHIHIKO)
東京大学・教養部・名誉教授
研究者番号： 90012327

山梨 正明 (YAMANASI, MASAOKI)
関西外国語大学・外国語学研究科・教授
研究者番号： 80107086

(4) 海外研究協力者

Thepkanjana, Kingkarn, Ph.D.
Chulalongkorn University (Thailand),
Linguistics Department, Associate
Professor

Laohaburanakit-Katagiri, Kanokwan, Ph.D.
Chulalongkorn University (Thailand),
East Asian Department, Associate
Professor

Croft, William, Ph.D.
University of New Mexico (USA),
Linguistics Department, Professor

Sanders, Robert, Ph.D.
University of Auckland (New Zealand),
Faculty of Letters, Senior Lecturer